

クラリネットとテナー・サクスをみごとに吹き分けるペプロフスキーの最新作

クラリネットという楽器が好きで、LPでもCDでも見つけるとよく買うのだが、近年アメリカでクラリネット奏者の数が少なくなってきたのが淋しい。パディ・デフランコは80歳を超えて頑張っているが、元テナーのエディ・ダニエルス、ユニークなドン・パイロンなどがいるが、いちばんクラリネットらしいまろやかで艶っぽい音をしていて好きなのはケン・ペプロフスキーだ。その上、テナー・サクスも味わい深くてうまいときているから文句なしだ。本アルバムはその両方を堪能させてくれる。テナーを吹くと。ホワイト・コールマン・ホーキングズブート・シムズカスコット・ハミルトンか、といったような温かいトーンで、線の太いゆったりした響きのプレイをみせてくれる。しかし、聴いている中に誰とも違う個性的な吹き方であることがわかってくる。

彼はこれまでコンコード・レコードへの吹き込みが多く、コンコード・ジャズ祭などに出演してきた。たしか日本へもコンコード・ジャズ祭で来日したのを聴いた記憶がある。

また、2001年にはJVCジャズ祭ニューヨークのプログラム“ソンドハイム&ジャズ・サイド・バイ・サイド”に出演し、カーネギー・ホールで演奏した。ジャッキー&ロイ、モーリン・マクガヴァン、ニーナ・フローリン、カート・エリングといった歌手とともに出演し、スティーヴン・ソンドハイムの曲を素材にして演奏していたが、ペプロフスキーのクリアなクラリネット・ソロが印象に残った。

いまいちばん活躍しているクラリネット奏者だが、このCDで、テナー・サクス奏者としての評価も高めるに違いない。

本作はアルバム・タイトルが「メモリーズ・オブ・ユー」となっているが、この曲名を見れば、誰だってクラリネット・キングだったベニー・グッドマンを思い出すだろう。ぼくだってそうだ。この曲はベニー・グッドマンの演奏で有名になり、とくに映画『ベニー・グッドマン物語』の中で演奏されて、さらに印象を深めた。ちょっと珍しいレコードにはローズマリー・クルーニーの歌をフィーチャーしたグッドマンのレコードもあった。ケン・ペプロフスキーのアルバムは「メモリーズ・オブ・ユー」で始まるので、クラリネットでどんなプレイをするのだろうか、と思ってプレイヤーのスイッチを入れると、なんとテナー・サクスの演奏なので、一瞬びっくりしたが、それがまたすてきなプレイなので、座り直して聴き直してしまった。この曲をテナーでこんなにみごとにプレイしたレコードをこれまで聴いたことがなかった。

その上、Disc 2の5曲目に、今度は「メモリーズ・オブ・ユー」をクラリネットで演奏しているのである。このちょっと聴き手をはぐらかしたアルバム構成のうまさに関心してしまったが、これは果たしてプロデューサー原哲夫のアイデアなのか、それともペプロフスキーのアイデアなのであろうか。それにしても洒落たアイデアには違いない。彼は全14曲のうち、テナーで8曲、クラリネットで6曲演奏している。テナー・サクスとクラリネットで「メモリーズ・オブ・ユー」を2回演奏するというのは、なかなか心憎いアイデアだと思う。

選曲がまたいい。よく知られたスタンダード・ナンバーが中心なので、一曲一曲聴き進むのが楽しみだし、原曲を知っていると、どんな演奏を展開するのか、ちょっと気になってくるし、前もって予想しているいる思いをめぐらすことができるので楽しみが倍加するのである。

1曲目の「メモリーズ・オブ・ユー」は聴きなれたメロディだが、テナー・サクスで聴くと、実に新鮮だ。あの百歳まで生きた黒人ピアニスト、ユービー・ブレイクの代表作だ。79年には彼の半自叙伝的なミュージカル「ユービー」が上演され、ぼくも観たが、自ら出演し、元気に歌ったりピアノを弾いたりしていた。

「アイル・ビー・シーイング・ユー」はサミー・フェインが1943年に書いた美しい曲だが、これを甘くやさしくクラリネットで演奏しており、クラリネットの抒情的で変化に富む音色とトーンをうまく生かしている。彼はクラリネットの魅惑的な吹き方を知り尽くしているようだ。それでいて、テナーの場合と同様、誰のものでもない自分独自の吹き方を示しているから、とてもフレッシュに聴こえるのである。

「ブライト・モーメント」はテナー・サクスで演奏したメロディの美しいロderland・カークの曲で、親しみやすさがいい。

「イン・ア・センチメンタル・ムード」もよく知られたデューク・エリントンの曲だが、この曲をクラリネットで演奏したのは正解だ。曲のもつベイスとセンチメンタルなムードを表現するのに、クラリネットは最適だし、どんどんとイメージ

Memories Of You

メモリーズ・オブ・ユー

Ken Peplowski Quartet

ケン・ペプロフスキー・カルテット

【DISC：1】

- メモリーズ・オブ・ユー**　テナー・サクス編 Memories Of You 〔E. Blake〕(5：31)
- アイル・ビー・シーイング・ユー** I'll Be Seeing You 〔S. Fain〕(3：48)
- ブライト・モーメント** Bright Moments 〔R. Kirk〕(5：06)
- イン・ア・センチメンタル・ムード** In A Sentimental Mood 〔D. Ellington〕(6：50)
- ドリーム・ダンシング** Dream Dancing 〔C. Porter〕(8：19)
- 春の如く** It Might As Well Be Spring 〔R.Rodgers〕(7：48)
- ラスト・ナイト・ホエン・ウィー・ワー・ヤング** Last Night When We Were Young 〔H. Arlen〕(4：41)

【DISC：2】

- フォギー・デイ** Foggy Day 〔G. Gershwin〕(5：53)
- ユー・マスト・ビリーブ・イン・スプリング** You Must Believe In Spring 〔M. Legrand〕(5：13)
- スマイル** Smile 〔C. Chaplin〕(4：34)
- ロータス・ブラッサム** Lotus Blossom 〔B. Strayhorn〕(5：05)
- メモリーズ・オブ・ユー**　クラリネット編 Memories Of You 〔E. Blake〕(5：31)
- バット・ノット・フォー・ミー** But Not For Me 〔G. Gershwin〕(7：31)
- プア・バタフライ** Poor Butterfly 〔R. Hubbell〕(6：26)

ケン・ペプロフスキー Ken Peplowski 〔tenor sax & clarinet〕

テッド・ローゼンタール Ted Rosenthal 〔piano〕

ゲイリー・マッツァロツピ Gary Mazzaroppi 〔bass〕

ジェフ・ブリリンガー Jeff Brillinger 〔drums〕

録音：2005年11月17、18日　ザ・スタジオ、ニューヨーク
<p>© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>
<p style="text-align:center">* Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan Recorded at The Studio in New York on November 17 & 18, 2005 Engineered by Katherine Miller Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara Front Cover：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo Artist Photos by Mary Jane Designed by Taz</p>

の広がっていく演奏であり、原曲のエリントン・サウンドも生かされていて申し分がない。もしエリントンが生きていて、この演奏を聴いたらにっこりしたに違いない。

「ドリーム・ダンシング」,「春の如く」,そして7曲目「ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワー・ヤング」とテナー・サクスの演奏が続く。「ドリーム・ダンシング」のスインギーな演奏ですっかりいい気分になってしますが、ペプロフスキーのちょっとざらっとしたホーキングズの様な音とスムーズなプレイはひととき輝いている。ハロルド・アーレンが作曲した「ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワー・ヤング」は完全なバラードだが、「春の如く」は少し感動的なバラード演奏である。ぼくはこの曲が大好きで、この曲が入っているCDはすぐ買ってしまうクセがある。中学生の頃に観たカラー映画『ステート・フェア』でこの曲を聴いてからいっぺんに好きになってしまった。ペプロフスキーが、この美しい旋律を生かしきっているので大満足だ。

「フォギー・デイ」は、ジョージ・ガーシュインの作曲で1937年の映画「踊る騎士」

の主題歌で多くのジャズメンが演奏してきたが、ケンはクラリネットを持って演奏する。心地よいテンポで軽快にプレイし、この曲の魅力を存分に生かしきっている。美しいテーマを吹奏するあたりからケンのきれいな音のクラリネットの響きに魅せられる。ピアノのテッドの快演も見逃せない。「ユー・マスト・ビリーブ・イン・スプリング」は、フランスを代表するポピュラー音楽の作曲家、バンド・リーダー、ピアニストとして名高いミシェル・ルグランの作曲。かつてピアノのビル・エヴァンスが好んで演奏した曲でもある。ここではバラードとして、幻想的に、ロマンティックに演奏される。ここではピアノのテッド・ローゼンタールが曲のムードを設定する演奏を行い、ついでケンのクラリネットがルグランの名曲をみごとに造形していく。レベルの高い音楽の輝きとはこのことだろう。

「スマイル」は、映画監督、俳優のチャールス・チャップリンはいくつか作曲しているが、その中でもジャズメンが一番よく演奏するのがこの曲である。1936年の映画「モダン・タイムス」の主題歌で、ゲイリー・マッツロツピーのウォーキングベースとケン・ペプロフスキーのテナー・サクスのデュオ温かいサウンドを奏でていて、ジャズっていいなあと実感させてくれる。ケンの線の太い、心を包み込むようなプレイには心酔ってしまった。

「ロータス・ブロッサム」はクラリネットの演奏であり、デューク・エリントンの片腕、作、編曲家ビリー・ストレイホーンの名曲。クラリネットによる「メモリーズ・オブ・ユー」は気負わず、淡々と原曲のメロディに沿って、クラリネットという楽器を輝かしく、美しく響かせて、しっかりと演奏し、まさに達人のプレイというべきだろう。テナーに戻つての「バット・ノット・フォー・ミー」はまるで歌うかのようにバースから演奏しているが、ゆったりしたあとのスインギーな演奏とのコントラストがみごとだ。豊かで線の太いテナーのトーンとバックのピアノ・トリオの躍動的なスイングとがびったり合っている。小粋なピアノとどっしりしたベースはテナーをうまくバックアップしているし、出しっぱらないドラムのブラッシュ・ワークも心地いい。レイモンド・ハベルが1916年に書いた「プア・バタフライ」が演奏され、聴きなれたスタンダードが、耳に気持ちよく響く。ペプロフスキーも小唄を素材にのびのびと思う存分テナーを吹き鳴らしている。表情も豊かで感情を込めたプレイとはこのことであろう。

ところで、彼はいま何歳なのだろう。調べてみると、1959年5月23日のオハイオ州生まれというから、46歳の時の録音ということになる。彼が好きなサクスはソニー・スティット、チャーリー・パーカー、ベン・ウエブスター、スタン・ゲッツ、そしてコールマン・ホーキングズだという。なんとなくわかる気がするが、ぼくが調べた本には好きなクラリネット奏者の名前はなかった。

クラリネットという楽器はヴァイオリン、トランペットとともにユダヤ人が最も好きな楽器であり、ユダヤ民族バンド、クレツマー・バンドには大抵クラリネットが入っているし、クラリネット奏者にはユダヤ人が多い。ベニー・グッドマン、アーティ・ショウ、ウォルター・リヴィンスキーがそうだし、映画監督のウディ・アレンは毎週ニューヨークで、ディキシーのクラリネットを吹いていたし、ヨーロッパ・ツアーの記録映画まで作った。『シンドラーのリスト』の監督スティーヴン・スピルバーグは、ポーランドかチェコだかで、この映画のプロモーション記者会見のあと、ジャズ・クラブのジャム・セッションに加わってクラリネットを吹いたという記事を読んだことがある。

ケン・ペプロフスキーも、このロシア的でスキーとつく名前を見たとき、クラリネットを吹き、てっきりユダヤ人だと思ったのだが、「ぼくはユダヤ人ではない」と言ったという話を小耳にはさんだことがある。それで本名を調べてみたら、ケネス・ジョセフKENNETH JOSEPHだった。ケン・ペプロフスキーは芸名であった。今度、ユダヤ人かどうか聞いてみよう。ユダヤ人かどうかを聞くことは決して失礼には当たらない。まともなユダヤ人はみんなユダヤ人であることに誇りをもっているからだ。

ペプロフスキーは1960年代末には兄のポーリッシュ・ボルカ・バンドで演奏し、78～80年にはトミー・ドーシー楽団で、80年代には自分のグループで演奏し、85年にはなんとベニー・グッドマンと共演している。その後、ローズマリー・クルーニー、エディ・コンドン、ジミー・マクパートランドらとも共演し、ディキシーの演奏も経験している。ともあれ、彼のようにクラリネットとテナーを鮮やかに吹き分けるプレイヤーは希有だ。

岩浪洋三